

【vol.63】 真のディミニッシュスケールを弾いてみる

どうも、大沼です。

始める前は、「サクッと2、3回で終わるかなー」と思っていたディミニッシュスケールですが、気がつけばもう6回目。

各回、9~11ページくらいのテキストになっているはずなので、ざっくり10ページとすると過去5回で約50ページ。

今回の8ページを入れたら、ディミニッシュだけで60ページ位やっていることになります。

普通の書籍などでは、1つのスケールに60ページも割くことはないので、謎のボリューム感になっていますね。

ですが、市販の理論書だけで学んで、ディミニッシュスケールが使えるようになる人はあまりいないでしょう。(※出来たら凄いです)

それが出来そうなのは、ディミニッシュに触れるまでにどこかで音楽教育を受けていて、その時点で、一定以上の知識と経験がある人ぐらいだと思います。

人生で初めて触る楽器がギターで、ロックやポップスなどのジャンルから入った人には、理論書だけではかなり厳しいモノがあります。

僕自身、ちゃんと仕組みと使い方がわかったのは、専門学校で先生に教わってからです。

そんなものを細かく解説していたら、60ページにもなるってもんです。

さて、そんなこんなでやってきたディミニッシュですが、今回は最初の方の(vol.58)テキストでちらっとお話しした、正確な意味でのディミニッシュスケールについて学んでいきましょう。

これまでやってきたのは4音で構成されるものでしたが、その大本となる8音で構成されたヤツですね。

ですがまあ、ぶっちゃけた話、一般的なロック、ポップスを弾いているだけならばあんまり使いません。

主に使う可能性があるのは、ジャズやフュージョンみたいなことをやっている人と、ジャズやフュージョンっぽいソロを弾きたい人位です。

後は、現代のポップスなどはアレンジが凝っているのも多いので、そういったものであれば出てくる可能性はありますが。

とにかく、普通の曲をやっている限り、8音構成の方は、使用頻度は低いですね。

実際の所、今までやってきた、4音構成のディミニッシュ・スケールですが、あれは正確には、ディミニッシュ・スケールというよりは、『ディミニッシュド・アルペジオ』とでも言うべきものなんですよ。

要するに、dim7コードの構成音4音をバラして、アルペジオ(分散和音)として弾いたものなので、そう呼ぶわけです。

ではなぜ、それをあえてディミニッシュ・スケールと呼んでいたかという点、

『一般的な曲(ロックやポップス)で、dimコードや、他のdimスケールを使うべき場所が出てきた場合、全8音のディミニッシュ・スケールではなく、ディミニッシュド・アルペジオを弾いた方が楽曲にハマリやすい』

からです。

要するに、ジャズやフュージョンなどの「複雑さを許容できるジャンル(曲調)」以外では、8音構成のディミニッシュみたいなスケールを使うと、響きが複雑でキツイワケです。

なので一般的に、何かしらの楽曲で「ここはディミニッシュ・スケール使わなきゃ」となった場合、ディミニッシュド・アルペジオをディミニッシュ・スケールとして弾いていけば、大体OKと言う感じです。

もちろん、その人がどんな事をやっているか？その時どんなプレイを求められているか？どんな事(レベル)をやりたいのか？にもよりますが、あくまで一般論として、です。

なので、ディミニッシュド・アルペジオの事を、普段はディミニッシュ・スケールと言う解釈で弾いている一方で、「これは本当はディミニッシュド・アルペジオなんだ」と、頭の片隅で思っただけでもらえれば、と。

そして一応、音楽理論としては、

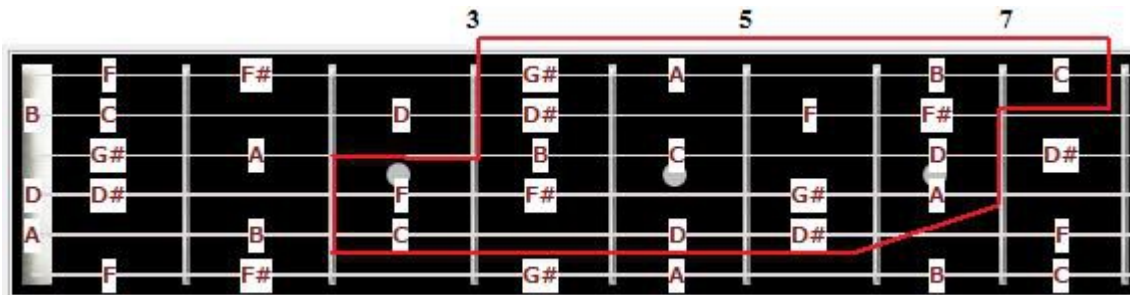
「ディミニッシュ・スケールといったら、正確には8音構成の方を指している」とも思っていてください。

この辺は、実用性と使用頻度の問題から、これまでの様な解説にしてきたので、よろしくお願いします。

それでは、実際に弾いていきましょう。

まずは、主要なポジション図から。トニックはCでいきます。

図1、C ディミニッシュ・スケール(5弦ルート)



(※譜面作成ソフトの都合で、音名がめちゃくちゃですが、正しくはスケールのインターバルに適した音名で呼ぶ事になります)

さて、よく構成を見るとわかりますが、全音(2フレット)→半音(1フレット)の間隔で、ずっと規則的に音が並んでいますね。

完全に全音→半音の並びなので、この流れで行くと、トニックからトニックまでで、全8音構成のスケールになります。

次に、スケールのインターバルを見ていきましょう。

※ディミニッシュ・スケールのインターバル

tonic、M2nd、m3rd、P4th、 \flat 5th(dim5th)、m6th、M6th(= \flat \flat 7th)、M7th

で、これを見せられても、正直、何をどうしたらいいのか悩む所ですよ。なので、もう少し詳しく、スケールの構造を分析していきましょう。

まず、何かしらのスケール(≒メロディ、フレーズ)を弾く場合、楽曲の中であれば、コー

ド(進行)の上で弾く事になりますし、バック無しソロプレイだとしても、key やコード進行は想定しますよね。

ならば、「このスケールはどこ(どのコードの上)で使えるのか？」という話になるので、スケールから、コードを割り出してみましょう。

コードの構成は、スケールのトニック(ルート)から1音おきに、3度で積み重ねるのが、一般的なセオリーでしたね。

※ディミニッシュスケールのインターバル

tonic、M2nd、**m3rd**、P4th、**b 5th(dim5th)**、m6th、**M6th(= b b 7th)**、M7th

この様に、トニック(ルート)から3度で重ねていくと、赤字で示した音が導き出されます。

仮にトニックをC音にした「Cディミニッシュスケール」を基準にするならば、

3和音の場合は、『root、m3rd、b 5th (C、E b、G b)』の『Cdim (Cディミニッシュ、Cディミニッシュ(ト)・トライアド)』になり、

4和音の場合は『root、m3rd、b 5th、b b 7th (C、E b、G b、B b b)』の『Cdim7 (Cディミニッシュ(ト)・セブン)』になりますね。

Xディミニッシュ・スケールから、Xdim、Xdim7のコードが導き出せる、と言う事は、そのまま、それらのコードの上でディミニッシュ・スケールが使える、と言う事になります。

なので今、例にあげているCディミニッシュ・スケールならば、まずはCdimかCdim7の上で使う事を考える、と。

これはそのまんまなので、非常にわかりやすいですね。『ディミニッシュのコードが出てきたら、ディミニッシュ・スケールを使えば良い』と言う事なので。

さて、もしかしたら、気になっている人がいるかも知れませんが、先ほどのディミニッシュスケールのインターバルで『M6th=b b 7th』と、なっている所がありますね。

これは、Cdimスケールの場合、M6th=A=b b 7th=B b bとなるので、実際に鳴らす音としては(ギターでは)同じです。

ディミニッシュスケールは全8音構成のスケールなので、これまでの様に、1~7度で音程

を表し、8度でオクターブ、と言う表記だと、必ずどこかの度数が重複する事になりますよね。

Xdim7の4和音の時も、4つ目に重ねる音が、6度(M6th)なのか、7度($\flat\flat$ 7th)なのか、解説としては曖昧な感じがします。

(※でもこの4音目は、多くの場合、コードネームの通り、7度として捉えます。Xdim7をハーモニックマイナーのモード(7度、VII dim7)で考えてみましょう。)

この辺りのインターバルの分類について、僕も色々調べてみたんですが、結局、様々な見解があり、はっきりとした答えは得られませんでした。

とりあえずこのテキストでは、先ほどから例に出している、

tonic、M2nd、m3rd、P4th、 \flat 5th(dim5th)、m6th、M6th(= $\flat\flat$ 7th)、M7th
(※ディミニッシュスケールの場合)

と言う、重複している所を、どちら側の視点からも見ておく様な表記を採用しています。
(※これは僕自身が覚える時に使った分類になります)

ただ、ある所で見かけた解説で、「これは“ディミニッシュ”という言葉の観点から見ると非常にしっくり来るなあ」と思ったインターバル表記があり、それはどのようなものかと言うと、8音構成のスケールなので、構成音に対して便宜的に1~8度の番号を振って、

tonic(P1st)、M2nd、m3rd、P4th、 \flat 5th(dim5th)、m6th、 $\flat\flat$ 7th(dim7th)、 \flat 8th(dim8th =dim1st=M7th)

と、この様に見てみる、と言うものでした。

(※これで先ほどのインターバルと実音は同じ(異名同音)です)

これが正式な見方かどうかはわかりませんが、『ディミニッシュ(減音程、狭める)』と言う『言葉』に対しては、わかりやすく表しているものだと思います。

と、こんな感じで、色々な見方を解説しましたが、とりあえず、これまで挙げたような、様々なインターバルの捉え方を知っておき、その都度、柔軟に分析して行ける状態になっておくのが、知識の習得としては融通が利いて良いのではないのでしょうか。

では、ここから実践ですが、以前(vol.58~61で学んだ時)、4音構成の「ディミニッシュド・アルペジオ」を使う時は、マイナーキーの5度(V7)の上で、ハーモニックマイナーのモード(特にVII dim7)との関係性から見ていきましたね。

今回はそれとは違い、普通に、『コード進行の中に Xdim7 のコードが出てきた時に、その上で、8音構成の X デミニッシュスケールを使う』、と言う観点で見ていきます。

もちろん、この様に普通に Xdim7 が出てきた時に、その上で4音構成の X デミニッシュド・アルペジオを使う事も可能なので、そちらも一緒にやってしまいましょう。

さて、以前も少し解説しましたが、dim7 コードを使う主な場面と言うのは、コードとコードの間に経過的に使う「パッシング・デミニッシュ」と呼ばれるものでしたね。

他にも、「その dim7 コードと共通のトライトーンを持つ、ドミナント 7th の代理コード」の様に使われたりもしますが、こちらはまだやっていないので、パッシング・デミニッシュの観点から練習するコード進行を決めましょう。

パッシング・デミニッシュについては、以下の一覧を覚えてしまうか、メモをとったり、テキストをプリントアウトするなりして、いつでも確認できるようにしておきましょう。

key=C 時のダイアトニックコードの間に入れることのできる、パッシング・デミニッシュの位置

※ 上行の場合は、全音間隔のコードの間に入れられる

-----⇒

T	5	5	6	7	8	10	10	12	12	13	14	15
A	4	3	5	5	7	9	8	10	10	12	12	14
B	5	5	7	7	9	10	10	12	12	14	14	15
B	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14

※ 下降進行にはあまり使われないが、マイナーコードとマイナーコードの間のデミニッシュは良く使われる。

※ Xm7(b5)のコードの前には、構成音が似通っている事から、dim7コードを置く事が出来ない、とされている解説もある。(こう書かれていない解説もある)

なぜ、この様になっているのか？については、細かい解説もあるのですが、そこまでやると話がかなり長くなるので、一般的な実用レベルとしては、この表の認識で十分です。

(※実際に鳴らしてみても、じっくり来るものを使いましょう。理屈に関しては、調べればすぐに出てきますので。)

今回は、ここから『I M7ー# I (b II)dim7ーII m7』の部分を抜き出して練習します。

key=C なので実際は、『CM7-C#(D ♭)dim7-Dm7』ですね。この進行のC#(D ♭)dim7の所で、C#(D ♭)ディミニッシュ・スケールを使う、と。

事実上、CメジャースケールとC#(D ♭)ディミニッシュスケールの切り替えですね。

進行としては、このままだと、トニック⇒ディミニッシュ⇒サブドミナントなので解決していませんが、ディミニッシュ・スケールの実戦なので良しとしましょう。

もし進行をループさせたい場合はDm7の後にG7を持ってくると、key=Cのツーファイブになるので、練習の時はバックングをそう作るのもアリです。

と、言う事で、実戦譜例は以下になります。

もうすでに、メジャースケールは一定以上弾けるはずですし、ディミニッシュスケールの構成は解説していますので、ポジションは自力で確認してみてください。

・バックング用コード進行例

・ディミニッシュスケールのトレーニング(※想定テンポは60~80です)

譜例 1

譜例 2

CM7

mf

TAB

C# dim7

Dm7

譜例3(ディミニッシュ・アルペジオ系フレージング)

CM7

C# dim7

Dm7

TAB

ちなみに、ディミニッシュスケールとコードにも、テンションの概念があるのですが、ちょっと話がややこしく、そちらも長くなりそうなので、また別の機会に解説したいと思います。

現段階では、8音構成のスケールを手や耳に馴染ませる事を意識しましょう。

後、今のテンションの話にも関係してきますが、スケールの8音の内、dim7コードに対してキツイ音とそうでない音があるので、それぞれの音の響きを聴いて、その辺りも何となくで良いので感じられるようになっておきましょう。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼